

「ガネフォに参加した水球チームの歴史的意義」

浦辺 登

「人の真価の知れるのは100年後。より、いっそう大きな人物は200年か300年の後でなければ分からない」。勝海舟（1823～1899、文政6～明治3）は、こんな言葉を遺した。幕臣という徳川幕府の立場にありながら、国の存立、行く末を考え、行動した人の決断は、幕府側から裏切り者と呼ばれた。明治の時代になっても、福澤諭吉（1835～1901、天保5～明治34）から「武士の道を外した」として海舟は批判を受けた。しかし、海舟没後120年余を経ても、海舟の名は西郷隆盛とともに色褪せることはない。その時代、その時代において渦中にあった人は、自身が時代のどこにいて、何を為したかは、皆目、俯瞰できない。ただ、己の最善の判断に従い、決断しただけ。事の大小、及ぼした影響力は、残念ながら当の本人には分からず、ただ、後世の人々が評価するのみ。

こんな事を書き連ねるのも、今から10年以上も前、玉利齋氏（当時は日本ボディビル・フィットネス協会会長、三島由紀夫にボディビルを指導した方）から、ガネフォについての話を聞いたからだ。当時、私の調査、関心の対象は玄洋社にあった。玄洋社とは、明治12年（1879）に旧福岡藩士族が中心となって立ち上げた自由民権運動団体である。玄洋社は欧米の植民地支配を受けるアジアの国々の独立運動を支援していた。その一つに、ガネフォが開催されたインドネシアも含まれていた。その玄洋社が独立を支援したインドネシアの歴史を知る意味からも、ガネフォを知る事は必須だった。すでに、映画「ムルデカ17805」によって、インドネシア独立運動の経過は知っていた。故に、ある程度のガネフォの資料は入手できると踏んでいた。

ところが、資料が、無い。国立国会図書館に行っても、わずかばかり。JOC（日本オリンピック委員会）のホームページには数行程度の記載しかない。これでは、ガネフォの概要すら理解できない。そこで、インドネシア協会であれば、まとまった資料があると思って訪ねた。しかし、50年以上も前の、黄

色く変色した会報誌が麻紐で結束されているだけ。その1ページ、1ページをめくって、「ガネフォ」の文字を探しては、事務機器販売店に持ち込んでコピーを繰り返した。果たして、本当にガネフォというスポーツ大会は、存在したのだろうか。そんな疑念すら湧きおこる程だった。けれども、「歴史は勝者によって作られる」という言葉があるように、何か、「ガネフォが存在したこと自体、都合の悪いこととして、封印されているのではないか。そんな疑問を抱いた。

仕方がない。こうなれば、そもそも、インドネシアとは、オリンピックとは、スポーツとは、何なのか。全てを理解できなければ、ガネフォの入り口には到達できない。そこで、日本とオランダ（インドネシアの旧宗主国）との関係史、近代オリンピックの歴史、スポーツ史に至るまでを調べた。

ありがたいことに、出版社の編集者は、つかみどころのない「ガネフォの話」でありながら、刊行に前向きだった。誰も書いたことがない実話ということもある。何か、次につながるという勘が働いたのかもしれない。出版社に送り込んだ原稿の初校（最初のゲラチェック）を進める段階で、ガネフォ選手団長であった頭山立國氏と偶然にも出会う事ができた。あの玄洋社の総帥と呼ばれる頭山満の直孫である。大変な緊張感をもって、ガネフォの原稿にお名前を入れさせて欲しいとお願いした。あっけなく了承いただいた際には、へなへなと地面に崩れ落ちる感じだった。即座に、編集者に電話を入れて、校正作業の中断と原稿の書き足しを告げた。

無事、平成25年（2013）に拙著『アジア独立と東京五輪』として刊行できた。日本では無名のスポーツ大会だけに、さしたる関心を持たれるはずもない。ただ、このガネフォの歴史は後世に伝えなければならない。後世の人々の評価を受けなければならない。歴史に一本のクサビを打ち込んだという自負だけだった。しかし、偶然を楽しむ神様はいるもので、出版社経由で村上（本郷）順三氏からガネフォの資料が送られてきた。どこで、どのようにして、拙著を目にされたかは知らない。けれど、ここから、ガネフォに出場された水球チームの方々が、毎年「ガネフォ会」を開催されていることを知り、大変な驚きだった。

「ガネフォ会」にお招きいただき、インドネシアでのガネフォに水球チームとして参加された選手の方々から、直接に話を聞く機会を得た。当時、福岡市東区にお住まいであった酒井哲也氏からも直接に話を伺うことができた。「ガネフォ会」で聞いた話において驚くのは、ガネフォに参加させないとの妨害行為の数々だった。そこまで、そこまで、するのですか？と哑然とした。さらに、水泳連盟の締め付けには、またまた、驚いた。ガネフォに参加するレスリングの選手は、連盟に脱退届を出し、インドネシアから帰国後、再び連盟に登録するという離れ業を演じた。玉利齋氏からレスリング連盟の実態を聞いていただけに、水泳連盟がガネフォ参加選手を「除名」処分にしたのには驚くばかりだった。いわば、水泳界からの追放である。もっと驚いたのは、大学のクラブからも除名処分を受けた方がいたことだ。これはもう、イジメを通り越して、人格の否定にも等しい。大学という教育の場でのクラブ活動は人格形成も含まれる。これでは、卒業証書は貰えても、人格に問題ありとの烙印を押されたのと同じではないか……。どれほどの精神的苦痛を抱えての人生行路だろうか。自身にその立場を置き換えたなら、やり場のない義憤をどこで解消すればよいだろうか。しかし、昭和47年（1972）、日本と中華人民共和国との国交樹立により、「除名」撤回、名誉回復となった。ガネフォに協力的であった中国の気配りと聞く。ふと、「スポーツは政治」と言い切ったスカルノ大統領の言葉が頭をよぎった。

ガネフォが開催された1963年（昭和38）頃、インドネシアは貧しかった。インドネシア協会に遺されていた資料を追うと、確かに日本はインドネシアに経済支援をしていた。しかしながら、大東亜戦争（太平洋戦争、アジア・太平洋戦争）を経て、復興途上にあつた日本からすれば、自国の事に必死で、インドネシアを重要視していなかったのではないか。ただ、石油、天然ガスなどの地下資源に恵まれる国としてのみ見ていたのではないだろうか。

そのインドネシアも、いまや見事に経済発展を遂げている。日本からすれば、重要な経済取引の相手国であり、親日国。歴史に「もし」は禁物だが、スカルノ大統領が国力と面子のすべてをかけて開催するガネフォに日本が参加していなかったならば、今頃、どうなっていただろうか。アジアにおける日本の存在意義は危うく、外交にも大きな支障をきたしている事だろう。中東のホルムズ海峡、マラッカ海峡が封鎖されれば、原油を積んだタンカーの航行は不可能。地勢的な意

味からも、日本にとって重要な国がインドネシアなのだ。もうひとつ、アジア外交でいえば、インドネシアと北朝鮮は友好国だ。北朝鮮と直接の外交関係を有しない日本にとって、インドネシアを介しての北朝鮮との外交関係は重要。特に、日本人拉致被害者救出交渉におけるインドネシアの存在は大きい。

日本とインドネシアとの外交関係を維持できたのは、先の大戦で独立運動に参加した旧日本兵もさることながら、スカルノ大統領の威信をかけてのガネフォ参加が強く日本との関係をつないだ。以前、インドネシアのユスロン大使（当時）とガネフォについて話をする機会があった。その際、滔滔と、ユスロン大使はガネフォの意義を語った。インドネシアという多民族国家を一つにまとめること、アジアにおけるインドネシアの存在感をアピールすることにおいて、ガネフォは重要なスポーツ大会であった。日本人は知らずとも、インドネシア側は、国家の歴史的な意義としてガネフォを見ていた。直接にガネフォの意義をユスロン大使から聞き出すことができたのは有益だった。

冒頭、勝海舟、西郷隆盛の事例を出したが、渦中の人々には、その時々のある出来事が、どれほどの偉業であるかなど想像すらできない。ただ、目前にある問題を、最善の判断に従い、決断しただけである。同じく、ガネフォ水球チームの方々がガネフォに参加したことは、やがて日本の歴史、スポーツ史に刻まれることになる。その日のために、今は、ガネフォ水球チームの歴史的偉業を一つでも多く記録として遺すことに専念したい。

以上

令和3年（2021）9月6日

浦辺 登（うらべ・のぼる）

昭和31（1956）年 福岡県筑紫野市生まれ。福岡大学ドイツ語学科卒。

現在日本の近代史を中心に研究している。著書に『太宰府天満宮の定遠館一遠の朝廷から日清戦争まで』、『霊園から見た近代日本』、『東京の片隅からみた近代日本』、『アジア独立と東京五輪―「ガネホ」とアジア主義』、『玄洋社とは何者か』、『勝海舟から始まる近代日本』（以上、弦書房）